地域おこし協力隊が着任

町の活性化に向け、初めて委嘱

町地域おこし協力隊として着任し、青木町長（右）と懇談する（左から）新井泰雄さん、河野綾華さん、山内彩さん＝４月６日、役場

町は本年度、デジタル化や情報発信の推進、商品開発などを通じた地域活性化を目指し、「地域おこし協力隊」を初めて配置しました。４月１日付で、東京都出身の山内彩さん（27）、福岡県出身の河野綾華さん（38）、大阪府出身の新井泰雄さん（64）が着任し、平泉に新しい風を吹き込もうと意欲を見せています。

役場で６日に行った委嘱状交付式で、青木町長は「町民との交流の場をつくって情報交換しながら、楽しんで活動してほしい」と激励し、都市部出身者による「外から目線」を生かした活動に期待。河野さんは「町外から見た平泉の良さを発信したい」と意気込みました。

隊員は２つのプロジェクトで活動。山内さんは「ひとにやさしいデジタル化推進プロジェクト」を担当。プログラミングを活用し、地域経済の活性化や行政の情報発信の重層化などに向けて活動します。

河野さんと新井さんは「平泉と言ったらこれ！　バズり商品開発プロジェクト」を担当。町の農産物を活用した「６次産業化」を促進するほか、町で栽培の拡大を目指す「ヤーコン」などを使った商品開発などを推し進めます。

隊員は、旧志羅山児童館を拠点に活動します。

任期は令和６年３月末までの１年間で、最長３年間まで延長できます。

地域おこし協力隊とは―

都市部から、少子化や過疎化などの課題を抱える地方に移り住み、地場産品の開発や販売・ＰＲなどの支援、農林業への従事、住民支援などを行い、地域への定住を推進する取り組み。

総務省が制度化したもので、町は令和５年度に初めて配置。隊員は、町の委嘱を受けて活動する。

平泉町地域おこし協力隊員の横顔

山内（やまうち）　彩（あや）さん　＝東京都出身＝

町がデジタル人材の育成と定着を目指して開催するプログラミング講座「スパルタキャンプ」を昨年受講。「平泉で出会った人たちの熱量に圧倒された。この地で何かできればおもしろいと感じた」と、移住を決めたきっかけを振り返ります。

高校卒業までを都内で過ごし、ドイツの大学を卒業。帰国して都内のＩＴ企業に勤務し、インフラ技術などに携わりました。

デジタルによって町民生活を便利にすることを目指し「全世代を巻き込んで町に必要なものをつくりたい」と意気込みます。

趣味のドライブでは、東京から大阪、四国までを10日かけて巡ったことも。「飲みニケーション」も好きで、「１年間で町民1,000人と飲みたい」と笑い、町民との交流を楽しみにします。

河野（こうの）　綾華（あやか）さん　＝福岡県出身＝

１年前に初めて岩手を訪れ、平泉の文化や食に触れ「人も、商品も、景観もいい」とほれ込み、隊員に。「平泉のおいしい食べ物や景観の素晴らしさなどをＰＲして集客につなげるため、町民皆さんの手伝いができれば」と活動への意欲を見せます。

地元でダンススタジオを経営し、ウェブを駆使した集客などに注力。ノウハウを生かし、特産品の周知や町産米を使った商品開発を展望しながら「生産者の思いやストーリーが必ずある。それを発信し、売り上げ増加に貢献したい」と思い描きます。

寺社や仏閣好きで、高校教諭（地理歴史）の免許を所有。温泉やカフェ巡り、読書など多趣味で、「図書館がある『エピカ』に通いたい」とほほ笑みます。

新井（あらい）　泰雄（やすお）さん　＝大阪府出身＝

「『片道切符』で腰を据えて頑張る。平泉に骨をうずめる覚悟」と力強いまなざしを見せます。町が栽培の拡大を図る「ヤーコン」を使った商品開発を目指してクラフトビールの試作にも取り組み「農家の皆さんが希望をもって栽培でき、所得向上に結び付くよう付加価値を生み出したい」と決意を新たにします。

貿易会社などに長く勤務し、仕事で昨年から平泉を訪れるようになり「温かい人柄に魅了された」と移住を決断。平泉の印象を「バチカン市国のよう。小さい町で穏やかに暮らせる。車を走らせればすぐ街があり、生活に困らない」と太鼓判を押します。

平泉の祭りやイベントに参加することが楽しみで、「みんなからは『やっちゃん』と呼んでほしい」と心待ちにします。